

「ひい！？ な、なに、なにをする気！？」

「ムネニ、タイエキヲヌツタグライデハ、マダタリナイヨウダカラナ。モット、キョウリヨクナビヤクヲ、チヨクセツソソギコム」

「注ぎ込むって一体何を、おぶっ！？」

悲鳴混じりの声で叫ぶマリンドったが、その声は言いたい事を全て出しつくす前に止まった。

男根に似た姿をしている雄触手が、口に突っ込まれたからだ。

いくら手足を拘束している物より幾分細いと言ってもそれは比較の話で、雄触手の太さは人の生殖器の比ではない。マリンの顎は外れそうなほど押し広げられ、呼吸すら難しい。それ以上に苦しいのが生理的な拒絶。

（い、いやあああああ！？ こんな、こんな汚いのが口に……！）

口の中に広がる例えような不快な味、不快な生命の脈動、そして男根に似た触手が口の中にある状況……不快感にマリンは顔を顰め、どうにか吐き出せないか四苦八苦する。しかし長大で、自由自在に動く触手を口の力だけで吐き出せる筈もなく、抵抗虚しく触手はマリンの体内を自由に往復し始めた。

———ぐぶっ、ぐぶっ、ぐぶっ……。

（いやああ……しよ、触手の汁、飲まされてるうう……えっちな気分させられる体液、飲まされちゃってるよお！）

喉の奥まで犯される度に、灼熱の体液が胃に落ちるのを感じる。体内に直接注がれた媚薬の効果は凄まじく、胸に体液をぬられた時とは比較にならないほど身体が燃えたぎってしまう。身体全体が渴きを訴えてくる。

その渴きが一瞬でも癒えるのは、雄触手の体液を飲んだ時だけ。

（嫌あ……触手の汁なんて飲みたくないのに……身体が勝手に飲んじゃうううう！）

いくら止めようと思っても、身体は体液を欲し続ける。疼きを取るために触手の体液を飲み、その体液でますます身体を火照らせる……まるで麻薬のような悪循環。本当の薬物中毒のように、地獄に堕ちていくのが分かる。

その堕ちる感覚すらも気持ちいい。

（ああ……触手汁……美味しい、よお……♪）

ついにマリンは、理性で触手体液が美味だと認めてしまった。

（美味しい……♪ こんな美味しいの我慢できるわけない！ もっと、もっと欲しい♪ だからいいよね飲んだって……だって抵抗出来ないんだもん！♪）

媚薬の魅力に屈したマリンは自分に言い訳をしながら乱れ、食欲に雄触手へと吸い付く。雄触手からもっと体液を食りたいあまり頭はピストンするように動き、喉奥を突かれる感覚がまた堪らなく気持ちいい。

「オキニメシタヨウダネ。デハ、ソロソロ、オモイツキリワタシノタイエキヲ、キミニノマセテアゲヨウ」

マリンの乱れ方が満足いったのか、触手頭部はマリンの耳元でそう囁く。思いつきり体液を飲みます。

その言葉に一瞬戸惑いを覚えたマリンだったが、困惑の表情はすぐに愉悦へと変わる。(ああ…：：： 体液が…：：：あのえっちなお汁をたくさん飲まされちゃう…：：：可笑しくされちゃう♪ でも、でも良いよね…：：：こんな美味しいの、我慢できる訳ないし…：：：抵抗しなくてもどうせ飲まされちゃうもん…：：： 諦めるしかないんだもん♪…：：：！♪)

マリンは絶望的な瞬間を蕩けきった想いで待ち望んでいた。

「サア、ソロソロ、シャセイシテヤルゾ」

だが触手頭部の言葉で僅かに正気が戻る。

「んぶう？」

「オヤ、イツテイナカッタカネ？ キミガイマクワエテイル、ダンセイキニニタシヨクシユカラハ、セイエキガデルノダヨ。チナミニ、セイエキノビヤクコウカハ、タイエキノヒデハナイゾ」

「ん、んんう！？」

触手頭部は嬉しそうに語るが、マリンの表情は強張る。

快楽に溺れてすっかり失念していた。怪獣の目的は自分を苗床にする事。媚薬に溺れてしまったら、快楽に溺れてしまったら…：：：延々と怪獣を産み続ける道具にされてしまう。

(だめええ！♪ それだけは、それだけはダメなお…：：：だめええ…：：：！)

僅かに残った、理性とは呼べない漫然とした意識が精液の注入を拒む。けれども身体は言う事を聞かない。

それどころか舐め回していた舌を突き出し、雄触手がより奥深くへと侵入出来るようになってしまった——瞬間

体験版はここまですりません。